

神護寺領播磨国福井荘

今 井 林 太 郎

一

播磨国揖保郡の福井荘は揖保川左岸の沖積平野に展開する荘園で、南は播磨灘に臨み、ほぼ中央を大津茂川が南北に貫いて流れている。北は大田荘・弘山荘に接し、西北は石見郷に接している。これらの地域は早くから開けたところで、『播磨国風土記』にも大田里・広山里・石見里などの名が見え、開墾についてのいくつかの説話が伝えられている。しかし福井荘の地はこのころにはまだ聚落としての発達がなかったようで、里の名はみえない。その後、十世紀ごろに編纂された『倭名類聚抄』には、大田郷・広山郷・石見郷のほかに福井荘の地に新田郷の名がみえる。新田郷は新しく開墾された村という意味であろう。

いつごろ福井荘が成立したかは明らかでないが、西岡虎之助氏によると、福井荘はもと興福寺領として成立し、興福寺が藤原氏の氏寺であるという関係から平安末期には藤原氏の氏長者で左大臣であった藤原頼長の管領するところとなったという⁽¹⁾。頼長の所領であったことは、仁平二年十一月頼長が春日詣の際、装束・屯食を賦課した荘・牧のなかに「福井荘」の名がみえることから明らかである⁽²⁾。ところが保元の乱で頼長が失脚すると、没官されて、そののち平家領となったらしい。治承四年十二月、平重衡が南都焼討ちに際し、播磨国の住人、福井荘の下司次郎大夫友方なるものに命じて在家を焼かせたことが『平家物語』にみえる。福井荘の下司友方は福井荘が平家領であったために、兵士として駆り出されることになったのであろう⁽³⁾。

やがて平氏が没落すると、福井荘は大田荘とともに後白河院領に編入せられるが、ほどなく後白河法皇から大塔領として高野山に寄進された。寄進のいきさつは空海自筆の金泥両界曼陀羅が高野山の住僧饒阿の奏請によって、寿永初年に蓮華王院から高野山の大塔に引き渡されたの

に関連して、大塔以下の仏事の用途に福井莊の所当地利をあてたいとの申請があったためである。⁽⁴⁾この両界曼陀羅はもとと淳和天皇の御願として神護寺に安置され、同寺の根本曼陀羅となっていたが、神護寺が衰頽し、法燈が一時絶えたため、仁和寺に移され、さらに蓮華王院に移されていたのである。⁽⁵⁾

高野山の大塔領となった福井莊がその後神護寺領となるに至ったのは、神護寺の復興に意欲をもやした文覚の画策によるものである。仁安三年文覚は神護寺に詣でてその荒廢を歎き、復興を心に誓った。そして承安三年四月、復興の費用に「千石莊」すなわち米千石の収入のある莊園の寄進を後白河法皇に請うたが、聴きいれられなかった。そのため法皇の面前で種々の悪言をはき、伊豆国に流される破目になった。その後、治承二年に許されて都に帰り、神護寺復興のため重ねて莊園の寄進を法皇に申出るとともに、かの曼陀羅を神護寺に安置したいと訴えた。法皇もついに文覚の熱意に動かされて寿永二年十月に紀伊国排田莊を寄進され、元暦元年八月には曼陀羅を神護寺に移すことを許された。そして翌二年正月さらに文覚の要望によって福井莊は曼陀羅に付属する莊園として神護寺の領有とすることが認められた。⁽⁶⁾こうして福井莊は神護寺の復興を契機に高野山大塔領から神護寺領となったのである。

このほか神護寺領として、寿永二年に宰相中将藤原泰通から紀伊国神野真国莊が、翌二年には源頼朝から丹波国吉富莊が、また安倍資良から備前国足守莊・若狭国西津莊が寄せられ、神護寺の経済的な基盤は確立するに至った。

文覚はこれらの莊園の管理にあたる預所の地位を重視し、元暦二年正月の起請置文のなかで、預所にはかならず常住寺僧の中から器量を簡定して補任するよう定め、俗人の採用を堅く禁じた。⁽⁷⁾俗人は財物を犯用し、寺の経済を乱すというのである。福井莊があとで述べるように東保と西保の二地区に分れると、それぞれの保に預所を置いて管理していた。貞応三年の福井莊西保田数注進状案には、預所の職務に対する報酬として預所佃三町が計上されている。⁽⁸⁾恐らく東保にも預所佃が存在したことであろう。

二

福井莊がいつごろから東保と西保に区分されるようになったかは明らかでないが、貞応のころ既に東保、西保の区分が行われていたことは、さきの貞応三年の福井莊西保田数注進状案によって知られる。この注進状案によると、西保の総田数は二〇六町五段余である。⁽⁹⁾一つの莊園が東西

の二区画に分割される際、ほぼ等分されるのが例であるから、福井荘は四〇〇町余りに及ぶ相当大的な莊園であつたと考えられる。福井荘の莊域については、弘安十年の福井莊坪付注進状をもとにして東郷松郎氏が詳細な研究を発表していらる。この注進状は前部を欠いており、福井莊全域について知ることはできないが、揖保郡に実施された条坊制にもとづいて、田畠の所在がしるされているので、条坊をたよりに福井莊の莊域を推測することができるのである。

揖保郡の条坊は、揖保郡の小宅莊の絵図に示されているように、条は西から東へと数え進み、坊は南から北へと数え進むのである。坊は通常里とよばれているものであり、坊のよび方は播磨では揖保郡以外に、明石郡、印南郡、飾磨郡などでも使われている。そして条坊内の坪の数え方は図のようになっている。⁽¹¹⁾ 坪の並べ方は通常条の進む方向に一の坪から始まって六の坪へ横に進み、そして坊の進む方向に一段上って横に順

条→

31	32	33	34	35	36
30	29	28	27	26	25
19	20	21	22	23	24
18	17	16	15	14	13
7	8	9	10	11	12
6	5	4	3	2	1

↑坊

次数えていくのであるが、揖保郡の場合にはそうした通則に従っていない。

さて弘安十年の福井莊坪付注進状に示された条坊をあげると次の通りである。

- 十八条 三坊 四坊 五坊 六坊 七坊
- 十九条 五坊 六坊 七坊
- 二十条 三坊 四坊 五坊 六坊 七坊 八坊
- 二十一条 四坊 五坊 七坊 八坊
- 二十二条 四坊

そして条坊の坪に記された名田の面積は、概算で九〇町歩たらずであるから、福井莊全体の面積からいえば四分の一に満たない。しかしここに示された条坊の区画の面積は六八〇町ほどであるから、福井莊はほぼこの範囲内におさまっていたものと考えて大過ないであろう。

この条坊を現在の地図の上にあてはめることによって、福井莊の莊域を推定することができるが、その際一つの手がかりとなるのは、福井莊の北に隣接する弘山莊の永徳二年八月の絵図が残っていることである。⁽¹²⁾ もっともこの絵図は原図ではなく、天明八年に書写されたものであるが、弘山莊の莊域が条坊によって示されている。それによると弘山莊は法隆寺領の鵜莊の北・西・南の三方を取りまくような形で存在し、南は

神護寺領播磨国福井莊

神護寺領播磨国福井荘

十八条八坊・十九条八坊までのび、莊堺に「南福井」としてなされている。したがって福井荘の北のはしは、十八条・十九条においては七坊ということになり、福井荘坪付注進状において名田がそれより以北に及んでいないのはそのためである。二十条・二十一条では名田は八坊の一の坪から六の坪に至る段までのびいるが、これが北に接する大田荘との境界であろう。

南のはしは十八条・二十条が三坊、二十一条・二十二条が四坊となっているが、恐らくこれが当時条坊の区画を実施できた南の限界で、そのすぐ南は海岸線であったと思われる。それ故二十条三坊の三十三・三十四の坪、二十一条四坊の五・九・十九・二十五の坪、二十二条四坊の六・七・八・十六・二十二の各坪の田地は「已塩損」と注記され、三坊・四坊は塩害を受けやすかったことが知られる。十九条だけが五坊以南に及んでいないのは、四坊・三坊の地に石清水八幡宮の別宮である魚吹宮があったためと思われる。魚吹宮はまた津の宮ともよばれ、現在宮内字小松原にあるが、これが福井荘の惣社として荘民の信仰の中枢をなしていた。文安年間の福井荘東保所務注進状の断簡には「福井惣社ウツキノ宮」とあり、東保上村の名田四町六段の年貢米のなかから魚吹宮の上分米として一斗八升がさかれている。¹³⁹

揖保郡の条里を復原された谷岡武雄氏の研究を参考にしながら、福井荘の条坊の範囲に含まれる聚落をあげると、糸井北・糸井南・高田・和久・坂出・坂上・朝日谷・山戸・宮田・田井・天満などである。なお坪付注進状では条坊の区画の施されていない地域に津分と新田分が記されている。その多くが塩損と注記されているように塩害と戦いながら開墾が進められていた地域であることがうかがわれる。津分はいまの津市場のあたりであろうか。

なお東保と西保との境界は、東郷松郎氏の推定されているように荘を南北に貫いて流れる大津茂川またはそれを利用した溝筋で、境界線はほぼ二十条の帯のなかにあったとするのが妥当であろう。

福井荘の荘域はその後、室町時代の末ごろには著しく拡張せられ、「悉皆八百町之在所」¹⁴⁵とも「福井荘廿八箇村^{分錢一万余貫}之在所」¹⁴⁶とも書かれている。八〇〇町といえば鎌倉時代のほぼ倍の面積である。福井荘二十八カ村というのは、吉川家文書の「福井荘村名注文」によると次の村々である。

熊見村	西敷居村	天満村	平松村	君が浜村	尾瀬嶋村	宮内村	大居村	宮田村
山和村	山しな村	大田脇村	谷村	壺藤村	糸居脇村	高田村	河原村	和具村

小宅外面村 坂上村 津濃市場村 見どろ村 あほし村 三石村 横浜村 興浜村 蓮花寺村
坂上村東

これらのうちその所在のわからない村もあるが、その地域はほぼ現在の姫路市の勝原区・大津区・網干区にまたがっていたといえる。なお、これらの村名をみると、三坊・四坊以南の地に開墾が進められた情況がうかがわれる。掛保川によって運ばれた土砂の堆積によって次第に陸地が形成されたことは、君が浜村・横浜村・興浜村などの村名からも知られる。尾瀬嶋村は大江島村のことで、福井荘が神護寺領となつて間もないころ、その南にある大江島は福井荘内であるか、興福寺領であるかについて紛争がおき、興福寺領であることが確認されたいきさつがある。¹⁰⁷ その大江島も室町末期には福井荘内に取りこまれていて、荘域の拡大には新田開発以外に他領の侵略ということも行われたことであろう。

三

荘園の開墾や耕作に当って灌漑用水の確保がいかに重要な問題であるかはいうまでもない。福井荘の東部はもっぱら北隣の大田荘原村にある原池からの水にたよっていた。原池は現在福井大池とよばれているが、福井荘は鎌倉時代の始めごろまで約四〇〇年間にわたって、この池の水を引いて荘内一七〇余町の田地を耕作してきた。ところが大田荘の橘判官がこの池を埋めて田地を造成しようとした。福井荘にとっては死活にかかわる問題であり、これを知った文覚は激怒した。僅か四、五町の田地を作るために四百年の慣行を無視して池を埋め、福井荘の田地一七〇余町を干損させんとするのは、「これハ橘判官殿、御道理^(三)□て候か」ときめつけている。そして「一日路をも人の御領の中をもほりかけて、水をとる事ハ、つねのならひに候」と、一日行程ほどへだった他領から水を引くことは決して特殊な事例ではなく、ごくあたりまえのことだと強調した。¹⁰⁸ この結末がどうだったかは史料がないので明らかでないが、江戸時代になってからもこの池の水が天満村・長松村・山戸村・熊見村・西土井村・丁村・宮田村の七ヶ村に供給されている事実からして、池の埋めたては文覚の強い抗議にあつて中止されたことが知られる。

荘の中央には大津茂川が流れていたが、この川は川巾が狭く、水量も豊かでなかったので、原池の用水とあい補いながら川筋の村々に灌漑していた。

福井荘の西部は林田川が掛保川に合流する地点近くの井堰から引いた用水によつていた。文禄四年に作製された掛保川の用水地図によると、

神護寺領播磨国福井荘

林田川から引かれた水は石見郷を潤し、さらに福井莊に入って糸井・高田・坂上・坂上出屋敷・和久皮多・津市場の村々を灌漑している。用水の権利は長い慣行にもとづくものであるので、鎌倉時代にもこの用水が利用せられていたことであろう。

これらの灌漑水路の維持補修の費用にあてるため、荘内には井料田とよばれる田が設けられるのが通例である。福井莊でも貞応三年の西保田数注進状案には井料田として一町一段が記載されている。¹⁹⁾なおこの注進状案には樋守一段が記されているが、これは樋の番人の費用にあてられるものであり、灌漑用水に関連のある田である。

西保ではこの井料田の管理権を地頭が主張し、預所との間で紛争がおきた。六波羅では天福元年判決に当って東保の井料田の慣行を基準にすることにし、東保の預所と地頭に慣行の報告を求めた。預所は「件田者、勸農之時、百姓并行事人等之食料也、為公文代之沙汰、所徴納也」と、井料田が用水路修築のときに、それに従事した農民や行事人などの食料にあてる田であり、その徴納は公文代の任務であると述べた。それに対し地頭はこのごろでは地頭が井料田の徴納を行っているが、それには固執しない。いずれが徴納してもかまわないと答えている。²⁰⁾つまり東保の地頭は井料田が本来預所の管理に属することを認めたのである。したがって西保でも東保の例にならって預所の主張が通ったわけである。

四

次に福井莊の地頭について述べておこう。福井莊が平家没官領であり、下司友方が平家の家人であったことはさきにも述べたが、こうした平家没官領には文治以後鎌倉幕府によって御家人が地頭として配置された。福井莊に地頭として最初に登場するのは梶原景時である。応長二年の福井莊東保宿院村地頭代澄心の重陳状に

当保者、追梶原平三景時之跡、任吉河左衛門經光法師之例、致本司之所務之間、一事以上無新儀沙汰²¹⁾とあって、東保の地頭が梶原景時からひきつがれたものであることが知られる。

景時は文治以後播磨国の守護として在任し、同時に国内のいくつかの莊園の地頭を兼ねていた。福井莊もその一つで、恐らく東保だけでなく西保も含めて福井莊全域の地頭であったのであろう。

その後、景時は正治元年の暮、結城朝光を讒訴したことから三浦氏をはじめとする有力御家人たちの排撃を受けて失脚した。そのため福井莊

の地頭には正治二年正月、景時に代って新しく駿河国の御家人吉川経兼が任命せられた。これは吉川経兼の父友兼の梶原景時追伐に立てた功績によるもので、友兼はこのときの負傷がもとで間もなく没した。そこで子の経兼が福井荘地頭職に補任されることになったが、次に示すのはそのときの將軍頼家の下文案である。

在御判

下 播磨国福井荘住人

補任地頭職事

藤原経兼

右人、可為彼職、但於庄務及年貢課役者、不成濫妨、可致沙汰之状如件、以下

正治二年正月廿五日²⁴⁾

この下文案にある藤原経兼は吉川経兼のことで、『尊卑分脈』によると吉川氏は藤原氏の家系である。経兼に与えられた地頭職が福井荘全域を対象としたものか、それとも東保だけであったのかは明らかでないが、梶原景時のあとを受けついでとすれば、福井荘全域と考える方が妥当であろう。それから三十年ほどたった天福元年九月十七日の六波羅下知状によると、東保の地頭は吉川経光、西保の地頭は藤原氏であって、東保と西保とに別々の地頭が存在している²⁴⁾。東保の地頭経光は経兼の子である。西保の地頭を藤原氏とし、していることはそれが女性であること²⁵⁾を示すもので、吉川氏の子女であることには間違いないが、東保の地頭経光との関係はよくわからない。しかし鎌倉幕府が西保地頭と預所との紛争の裁定にあたり、東保地頭兼光の例を基準にしていることは、両者が吉川家の惣領家と庶子家との関係にあることを想像させる。

なお地頭として福井荘に下った吉川氏の重要な任務の一つが海上警固であったことは注意をひく。福井荘には古くから知られた港、魚吹津があり、福泊と室津の中間に位置して瀬戸内海交通の要地であった。そのため守護の梶原景時はここを手に入れて水軍基地を設けていた。吉川氏が景時の後任に選ばれた大きな理由は、吉川氏が駿河の入江の出身で水軍の経験をもっていたためであろうという²⁶⁾。したがって吉川氏は単に地頭というだけでなく、水軍の指揮者でもあったのである。

ついでに福井荘に下った吉川氏が、播磨における浄土宗信仰の発展と深いかわりのあったことに触れておこう。中世の播磨の地誌『峯相

神護寺領播磨国福井荘

記』には次のような話を伝えている。

文治年中のころ、室の泊の長者の家に一人のみすばらしい老法師があらわれ、柴取りや木こり、もちかつぎなどして召し使われていた。そのころ長者は今古集を書写していたが、漢字が書けないので、そのところをあけておいて、さて誰に頼んだものかと困っていた。ところが長者が外出して不在の間に、すぐれた筆跡で空白の部分はもとより作者の名まで書きいれてあった。下女に尋ねると、あの法師がなにか書いていたよだという。不審に思っていたところ、たまたま吉河一族が福井荘を拝領して下向し、室の泊にもやってきた。そしてこの法師を見付けると大いに敬意を払い、合掌して礼拝した。いぶかる長者に吉河氏は、これこそ法然上人の高弟で、近ごろ都から姿を消した信寂上人であると説明した。こうして吉河氏はしきりに辞退する信寂を福井荘に招き、朝日山の東麓に堂舎を建立して住まわせ、おおいに崇めた。この上人の門流が播磨義とよばれる浄土宗の一派である。

地方豪族の浄土宗信仰を物語る興味ある伝承であるが、吉川氏が福井荘の地頭に任命されたのは文治年間から十年余りたった正治二年のことであり、『峯相記』の記述は年代的にもほとんど矛盾がない。播磨ではこの後、文永年間に土豪たちによって、「五ヶノ奇麗ノ念仏堂」が建立され、浄土宗信仰の隆盛をみたことが『峯相記』に記されているが、その種をまいたのは信寂を招いた吉川氏であり、朝日山東麓の一角は播磨浄土宗の発祥の地となったのである。

五

さて東保では吉川経光のあと、その嫡子経家が保内の上村地頭職をついだが、経家は其所領を「(梶原景時)かちわらかけ時かあとを、(勲賞)くゑんしやうにあて給はるところの有りやうなり」と述べ、吉川家の本流であることを自負している。(20)この本領は三十一町三段の名田畠で、東保の地頭領の中核をなすものであった。なお上村のうちの一部の屋敷・給田は経光の庶子経高に譲られた。(21)そのほか東保の宿院村・木屋村・水度呂村にもそれぞれ吉川氏の一族が村地頭として配置され、上村地頭の経家が惣領地頭としてこれら村地頭を統轄する形で東保の支配が行われていた。すこし時代は降るが赤松円心が貞和元年福井荘の闕所を注進した請文によると、宿院村の得分三十石の地は矢部孫三郎の所領、木屋村の得分三十余石の地は入江孫五郎入道の所領であった。(22)矢部・入江はいずれも吉川氏の一族である。

吉川経家が東保の惣領地頭であった応長のころ、宿院村の地頭と東保の預所との間で訴訟が続いていた。応長二年の宿院村地頭代澄心の重陳状によってその紛争を追ってみよう。^四

地頭側の言分によると、福井荘ではもともと預所は一人であったが、延慶二年に前例を破って播磨房・湯浅宗武の二人が預所に任命された。しかも湯浅宗武は武家被官の身であって、その就任は厳制に背くものである。そのうえ播磨房は在荘の預所として新儀に数町の田畠を耕作して、百姓を足手牛馬以下に召し使い、一方、湯浅宗武は在京の預所として、紀州から多数の悪行人を引きつれて荘家に乱入し、農耕最中の農馬数十疋を奪取して京都を往復する乗馬や夫駄に使用するなど、その悪行は数えあげられないほどである。それなのに宗武の代官頼祐は二十六カ条にわたって地頭の新儀非法を訴えた。そこで一々それについて弁明したところ、こんどは三カ条にしばって訴えをおこした。しかしいわれのない奸訴なので却下するとともに、預所宗武を「傍輩上司之罪科」に処し、解任してほしいというのである。

「傍輩上司之罪科」というのは、鎌倉幕府の「御成敗式目」に

関東御家人申京都、望補傍官所領上司事

とある条項を指すもので、幕府は御家人が京都すなわち荘園の本所・領家に頼みこんで、傍輩の御家人が地頭となっている荘園の上司、すなわち預所などに就任することを禁止している。一つの荘園に御家人が上下の關係で入りこむことは、紛争をおこすものになるというのが禁止の理由であって、これは頼朝以来のおきてであるから、今後みだりに望むものがあれば、所領一所を没収すると規定している。

預所の播磨房も永仁のころ、木屋村の地頭光家から「為武家被官之身、背御制」として訴えられたが、播磨房は代々当寺の寺僧で、さしたる御家人でないという弁明が認められて、地頭の訴えは却下された。しかし湯浅宗武は紀伊湯浅荘を本拠とし、在田郡一帯に勢力をはる湯浅氏の一族で、れっきとした御家人であり、「為本在京人之一分、当奉公之仁」であった。したがって当然幕府のおきてに触れるわけである。そのうえ神護寺としては文覚の置文にも背くのである。にもかかわらず神護寺が湯浅宗武を預所に任命したのは、地頭吉川氏がしだいにその領主権を強め、もはや神護寺の手におえなくなってきたためであろう。それは東保雑掌が地頭の非法として訴えた三カ条のなかに読みとることができる。雑掌の言分から、(一)永仁年中に木屋村・宿院村・水度呂村の地頭が所務について雑掌と相論をおこしていること、(二)地頭が正枝名を押領して年貢課役を抑留し、下地を雑掌や下司に渡さないこと、(三)地頭加徴米は内検のうえ得田にだけかけるべきであることを、損田からも加徴米を

取りたてていること、などがわかる。

地頭代の澄心は、右のうち、(二)、(三)については全くその事実がないと否定し、(一)については宿院村・水度呂村の相論はまだ裁判中であるが、木屋村の相論は地頭側の理を認める判決があったといっている。そして澄心の主張のなかでとくに注目されるのは、雑掌(預所の代官)が現地の所務に参与してはならないとしている点である。その論拠として幕府の貞永元年の下知状および寛喜元年の関東御使の分文をあげている。この論理から雑掌は荘官・名主の給田について口出しすべきではないし、地頭加徴米の徴収についても口出しすべきでないといひ、もし地頭加徴米について先例に反した取り方をしているということであれば、百姓が直接訴訟すべきであるといっている。地頭は雑掌の下地管理権を排除し、それを地頭の手完全に掌握しようとしているのである。

こうした地頭の攻勢に対して、これを防ぎ止めるには強力な武力的背景をもつ人物を預所に起用することが必要であった。当時播磨国の守護は六波羅の北方であったので、神護寺はその有力伺候人である宗武に眼をつけたのであろう。領主制の発展をめざす吉川氏にとって宗武の預所就任は大きな障害であることはいうまでもない。そこで、吉川氏は「傍輩上司之罪」で、これを排除しようとしたのである。

次に西保に眼を移そう。西保には貞応三年の田数注進状が残っているので、保内の様子がある程度うかがえる。それによると西保の総田数は二〇六町五段余で、保内には今西宮・辰社・池上寺・大宅寺・蓮花寺などの社寺があって、その神田・寺田が設定され、神護寺側の管理人である預所・下司には預所佃三町、下司給三町が支給されている。地頭の給田、給名についてはとくに記載がないが、損田のなかに「地頭方二丁七反」とあるので、地頭領の存在することは明らかである。灌漑用水に関連して井料田一町一段、樋守一段が設けられていることはさきにも触れた。

この田数注進状で注意をひくのは、損田が現作田の四割以上にも及んでいることで、農民の現作田については一町につき三段二〇代の割合で損田を認めている。恐らくこの年はかなりの凶作であったことによるものであろう。なお損田のなかに、「番頭方九反」、「名頭方一丁四反」が見え、西保では有力農民が番頭・名頭として村支配の末端組織を構成していたことがうかがわれる。

この西保で貞永のころ、地頭藤原氏の非法をめぐって地頭と預所法橋有全との間で相論が行われていた。その内容を貞永元年九月の鎌倉幕府の下知状、翌天福元年九月の六波羅下知状からうかがってみよう。

相論の第一点は、下司職・公文職に関するところで、地頭はすでに七年間にわたって下司職・公文職を兼帯し、下司・公文の給田・屋敷を押領

している。そのため莊官らは領家の所務に従わない。そこで領家としては莊官らの本給田・屋敷については、一応既成事実を認め、莊官らには新しく給田・屋敷を支給して彼らを召仕うことにした。したがって莊官の所職といい新給田・屋敷といい、領家の進退に属すべきものである、というのが預所の言分である。これに対し地頭の方では領家が莊官に新給田を与えるとき、「可相計之旨、数篇問答之後」莊官が拝領したのであるから、預所・地頭の双方が召仕うべきであると主張した。「可相計之旨云々」というのは意味がとりにくい、新しく給田を設定するについて領家側の一方的な意志だけでは実施できなくて、地頭となんらかの交渉を持ったことを意味しているであろう。しかもこの問題について幕府は東保の例によらしめることにしたが、東保の地頭経光法師の言分と預所覚蔵の言分とがくい違っているため、六波羅では再び関東に注進して、その成敗を待つことにした。

相論の第二点は地頭名の所当未進に関する問題である。東保の預所覚蔵によると、地頭名というのはもとと預所名であった永安名を地頭が押領して地頭名にしたのである。したがって地頭名については所当を領家に弁済するのが当然であると説明している。東保の地頭もそれには異論がなかった。六波羅では先例にまかせて所当年貢を弁済するよう命じた。これだけなら問題は簡単であるが、地頭は平民名に属する新田を抑留して地頭名の内に取り入れていたようである。このことははしなくも預所が地頭名の未進分を新田の恒光・武末・有久らにかけようとしたことから発覚した。地頭名の未進を恒光・武末・有久らの新田にかけるということは、これらの新田が地頭名であることを意味する。そこでこれらの新田と永安名との関係がただされることになった。幕府はこれらの新田が永安名の内であれば問題はないが、もしこれらの新田が平民名に属するものであって、これを地頭が抑留して地頭名に編入したのであれば、本名に糾返するよう命じている。弘安十年の福井莊坪付注進状によると地頭名の永安名は一二町一段一〇代で、これは東保・西保含めての面積であるから、西保の地頭名はその約半分の六町前後であろう。相論の第三点は、地頭名に課せられた伊勢神宮の役夫工米の未進で、幕府は東保ではすでに納めているので、東保の例にならって早く沙汰するよう命じた。

相論の第四点は地頭例損田・地頭代損田に関する事で、東保の預所の言分によると、地頭例損田は地頭が勘料として馬一疋と菓子を送って免除されたものであり、地頭代損田は検注使の意見によってきめられたものであるという。そこで地頭がそれらの損田を勝手に広げることのないよう指示している。

相論の第五は公文算失・公文例損・下司損田に関するところで、預所の言分ではこれらの田は領家・預所の進退に属するということなので、檢注使の決定に従うよう指示している。

相論の第六点は虫損に関するところで、東保の地頭はそれについては知らないと答えたので、預所の言分に従って内檢使が檢注をとげてきめるべきであると指示している。

相論の第七点は今西宮の御供田および修理田に関するところで、これについては地頭が関与することを禁じている。
相論の第八点は井料田に関するところであるが、これについてはさきに触れたので省略する。

これらの相論を通じて、西保の地頭吉川氏が預所名や下司・公文の給田・屋敷を押領し、平民名の新田をも地頭名に取りいれるなど、地頭領の拡大を積極的にはかり、さらに従来預所の権限に属していた井料田の管理や損田の決定にまで地頭の権限を伸そうとしていたことが知られる。しかし西保における吉川氏の領主的発展は必ずしも順調ではなかったようで、西保左方の八十石の得分のある地は、その後北条氏得宗被官の大仏維貞の所領とな³³っている。その時期は明らかでないが、恐らく北条氏得宗が播磨国の守護であった弘安ごろであろうと思われる。

六

南北朝の争乱は地方の土豪にとって所領を拡大する絶好の機会でもあった。文保元年吉川経家から福井莊東保上村地頭職を譲り受けた吉川経景は弟経清とともに伯耆船上山の陣営に馳せ参じ、その功によって経景は元弘四年正月後醍醐天皇から上村地頭職安堵の綸旨を与えられた。³⁴また弟の経清は北条氏の滅びたあと關所となっていた西保左方八十石の地を、建武元年十二月勲功の賞として後醍醐天皇の綸旨をもって与えられた。³⁵かくて吉川氏はいったん失った西保左方を回復したのである。

ところが建武二年足利尊氏が後醍醐天皇に叛旗を翻すと、兄の経景は尊氏方についたが、弟の経清は後醍醐天皇の南朝方に属して、西撰山地の南党の拠点丹生寺城に立てこもり、兄弟が両派に分れた。経清は暦応三年六月、赤松円心の攻撃を受けて戦死し、経清とともに丹生寺城にあった東保宿院村の地頭矢部孫三郎も、丹生寺落城のときに逐電した。このため西保左方および東保宿院村は關所とせられた。³⁶また東保木屋村の地頭入江孫五郎入道は箱根竹下合戦のさいに逐電し、木屋村も關所になった。³⁷こうして福井莊のうち東保の宿院村・木屋村、西保の左方が、南

北朝の混乱のなかで吉川氏一族の手を離れた。そのうえ経景の東保上村地頭職も梶原平四郎に押領される悲運に見舞われた。³⁸⁾ 経景は必死に訴えたことであろう。その結果暦応二年三月、足利尊氏は播磨の守護赤松円心に東保上村地頭職を経景に引き渡すよう命じ、円心によって翌四月経景に引き渡された。³⁹⁾

経景には子が多かったので、甥の経朝が家をつぎ、暦応四年十二月、東保上村地頭職を譲り受けたが、経朝は福井荘の吉川氏の旧所領の回復に乗り出した。経朝は福井荘内の闕所地三カ所が一族庶子らの所領であったという由緒を申立て、康永二年から貞和四年まで六年間粘り強く返還を申請した。ようやく成功するかに見えたが守護寺からこれらの闕所地を御影田に寄進してほしいという申請が幕府に出され、結局闕所地は守護寺に引き渡されてしまった。そして経朝には恩賞として別の所領が与えられることになったが、経朝は

縦先立雖被行他人、無由緒相違之時者、給当給人替、被返付本主者通例也

と幕府の処置に抗議し、内奏方について、闕所地を経朝と寺家とで折半する案を申請した。ところがこの案もいったんは認められながらも、なかなか実行に移されなかった。そこでついに貞和四年八月、闕所地の半分に相当する西保左方を恩賞として宛行われるよう將軍に訴えた。⁴⁰⁾ その結果を知ることができないが、福井荘の惣領地頭として一族庶子を村地頭に配置し、在地領主としての発展をめざした経朝の努力もなかなか実らなかったことがわかる。

その後応仁の乱のおきるころまでの百年ほどの間は、史料がないので福井荘における吉川氏の動きはつかめない。応仁の乱が始まり、赤松氏が細川勝元の支持を得て播磨を回復すると、吉川経基は東軍に属する赤松政則に従って上京し、一条高倉や武者小路・今出川北小路で西軍と戦い、細川勝元から感状を与えられた。こうした軍功によって経基は応仁二年三月室町幕府から福井荘を返付された。左に掲げる文書はそのことを伝える幕府奉行連署奉書である。

播磨国福居荘事、被返付訖、早退競望之族、可被全所務之由、所被仰下也、仍執達如件

応仁二年三月五日

散位（花押）

丹後守（花押）

吉川次郎三郎殿⁴¹⁾

守護寺領播磨国福井荘

このとき經基に返付された福井莊が福井莊全域をさすのか、それとも福井莊の一部をさすのかは右の文書からは明らかでない。ところが文明十八年十二月晦日付で浦上則宗が吉川經基にあてた書状には、「当国福井莊内御本領事、同名左衛門尉殿依御忠節、任御支証之旨、渡被申候」⁽⁴²⁾とあって、經基に与えられたのは福井莊のうち吉川氏の本領であったことがわかる。この本領のことは、また吉川氏の屋敷分ともよばれるもので、「悉皆八百町之在所」のうち、「屋敷千にて候」とあるように、一千貫文の得分のある所領であった。吉川氏の本領といえど東保上村地頭職のことであろうが、吉川氏はその本領すらある時期に手離していたことになる。經朝以後百年ほどの間には、播磨では嘉吉の乱で守護の赤松氏が滅び、山名氏が代って守護として入部するような大きな政変があり、吉川氏のうえにも何か異変があったことが想像される。

本領を回復した吉川氏は、これを足がかりに福井全莊の回復をめざし、文明十八年十二月にまず「福井惣莊代官職」⁽⁴⁴⁾を守護赤松政則から与えられた。このころ吉川氏の福井莊掌握の進んでいたことは、文明十九年四月福井莊の名主百姓が吉川經基に提出した請状からうかがうことができる。この請状には英賀・光明山・松原の陣に参加しなかった高田三郎左衛門尉ら十二人の名主百姓が名前をつらね、

右名主百姓事者、当御陣堪忍仕候上者、脇散在之者、雖有緩怠私曲、蒙仰候て、堅可申付候、然者雖為何時、御陣替之御時者、庄内百姓悉召具候て御供申、弥可抽忠節候、仍為後証請状如件⁽⁴⁵⁾

といる。これら十二人の名主百姓が脇散在の百姓を取りしめ、陣替のときには庄内のすべての百姓を率いて従軍し、忠節を尽すというのである。宛名の吉川經基は赤松氏に従って山名氏との戦いしばしば戦功を立て、ことに文明十九年三月の書写坂本の戦いでは先陣を勤めて刀傷を受けている。こうした功績が認められて、ついに延徳二年二月「当家家本訴福井庄廿八箇村^{分錢}之在所」⁽⁴⁶⁾を守護赤松政則から引き渡された。吉川氏の宿願がやっと果されたのであるが、「当家家本訴」とあることは、吉川氏が福井莊回復について室町幕府や守護赤松氏に運動を続けていたことを物語っている。

註

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| (1) 西岡虎之助 神護寺領莊園の成立と統制(莊園史の研究下巻一) | (4) 高野山文書之四 |
| (2) 台記仁平二年八月二十一日の条 | (5) 神護寺文書一 |
| (3) 西岡虎之助 前掲論文 | (6) 神護寺文書一 |

- (7) 神護寺文書一
(8) 高山寺所蔵不動法裏文書
(9) 高山寺所蔵不動法裏文書
(10) 東郷松郎 鎌倉時代における神護寺領福井荘の荘域について（神戸商科大学人文論集第九卷第一・二号）太田順三氏はこの田畠注進状を西保のものとされている（鎌倉期の荘園と勸農、歴史学研究三七七号）
(11) 今井林太郎 大徳寺領播磨国小宅荘（大手前女子大学論集第七号）
(12) 竜野市円尾亀次郎氏所蔵
(13) 神護寺文書二
(14) 谷岡武雄 播磨国揖保郡条坊（里）の復原と二三の問題（史学雑誌第六一編第一号）
(15) 吉川家文書之一の三五三号
(16) 吉川家文書之一の三三二号
(17) 神護寺文書四
(18) 神護寺文書二
(19) 高山寺所蔵不動法裏文書
(20) 神護寺文書一
(21) 神護寺文書一
(22) 神護寺文書二
(23) 吉川家文書之一の一号
(24) 神護寺文書一
(25) 高尾一彦 淡路国への鎌倉幕府の水軍配置 下（兵庫県の歴史8）

神護寺領播磨国福井荘

- (26) 吉川家文書之二の九八九号
(27) 吉川家文書之二の一〇三六号
(28) 吉川家文書之二の九九七号
(29) 神護寺文書二
(30) 高山寺所蔵不動法裏文書
(31) 神護寺之書一
(32) 神護寺之書一
(33) 吉川家文書之二の九九七号
(34) 吉川家文書之二の九九〇号
(35) 吉川家文書之二の九九五号
(36) 吉川家文書之二の九九七号
(37) 吉川家文書之二の九九七号
(38) 吉川家文書之一の二九一号
(39) 吉川家文書之一の三〇一号
(40) 吉川家文書之二の九九八号
(41) 吉川家文書之一の二九一号
(42) 吉川家文書之一の三〇二号
(43) 吉川家文書之一の三五三号
(44) 吉川家文書之一の三〇二号
(45) 吉川家文書之一の三三三三号
(46) 吉川家文書之一の三三二二号